

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：33808

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25590198

研究課題名(和文)いじめ問題の介入に資する孤立者の環境認知の特徴と孤立無援感の研究

研究課題名(英文) Characteristics of victim's environmental cognition in bullying problem and the influence of isolation

研究代表者

波多野 純 (Hatano, Jun)

静岡英和学院大学・人間社会学部・教授

研究者番号：10311953

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：教育現場等でのいじめ問題では、被害者が学校の人間関係の中で孤立していることがほとんどである。しかし従来のいじめ研究は、孤立した被害者が学校世界や周囲の物理的・社会的環境をどのように認識しているのかについて研究してこなかった。本研究は、文献研究、いじめ経験者への面接調査、2つの実験を通じて、孤立者が環境認知においていかなる特徴を示すのかを検討した。その結果、孤立の経験は環境認知に変容をもたらす(例えば他者との物理的距離を過小視する)などの特徴が見出された。

研究成果の概要(英文)：In the problem of bullying in school, victims are usually isolated from their classmates. But existing psychological research on bullying did not pay attention to how the isolated victims recognize their physical and social environment at school. This research examined the characteristics of environmental cognition among isolated victims through literature study, interview with former victims, and two experiments. The results showed that the experience of isolation changes the victim's environmental cognition (e.g. underestimation of the distance to the classmates or the victimizer).

研究分野：社会心理学

キーワード：孤立 いじめ 距離の認知 対人距離

1. 研究開始当初の背景

いじめが日本で社会問題化した1980年代以降、被害者の自殺を契機として社会の注目を集めるという状況は、ほぼ10年ごとに繰り返されている(森田, 2010, いじめとは何か, 中央公論新社)。20年以上にわたって様々な対策が講じられてきたが、いじめへの介入の研究は、今もなお急務である。また近年では、インターネット等の通信技術が、いじめの空間・時間を拡大させてもいる。いじめ研究の視点や方法にイノベーションが求められているといえよう。従来の研究は、いじめ現象の集団性を強調するあまり、被害者自身の視点から事態を理解するという発想を欠いていたように思われる。そのため、いじめの中で孤立した被害者が、心理学的に経験する環境変容についての情報は少ない。また、学校環境を含む時間・空間の認知は、環境心理学や行動地理学が空間認知やメンタルマップ等の概念で研究を蓄積しているが(中村・岡本, 1993, メンタルマップ入門; 佐古・小西(編), 2007, 環境心理学), それらの知見がいじめの研究に適用されたことはないようである。こうした背景から、孤立した人間にとって周囲の社会的環境や時間がどのように認知されているのかを検討し、新しいアプローチで孤立無援感を理解することが求められる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、いじめ被害者の支援に役立てるために、孤立状態にある人間の環境世界に対する認知を、空間認知の視点から検討し、孤立無援感の実証的な理解を進めることである。多くのいじめ事例において被害者の孤立は共通の現象であり、それにとまなう孤立無援感はいじめの被害を深刻化させる重要な背景である。しかし従来の研究は、孤立状態にある人間の視点から見た環境世界がいかに変化するかを明らかにしていないため、被害者のいま・ここを理解するための基本的情報が不足している。本研究では、孤立者から見た周囲の社会的空間がどのように感じられるかを解明し、支援に役立つ実践的情報の提供を目指す。

3. 研究の方法

(1) いじめ被害者における孤立感とその空間認知に関する理論的検討

国内外のいじめ研究を展望した最近の論文をみると(戸田, 2010), 従来の研究には、被害者の視点からいじめを理解するための基本的情報が欠いていることがわかる。そのひとつが、孤立状態において周囲の環境はどのように認知されるのかという問題である。そこで、孤立に焦点をあてていじめおよび関連研究の文献を展望するとともに、環境認知に関する研究の知見を整理し、孤立者から見た環境世界について理論的に検討する。特に、孤立感が「孤立無援感」へと移行するような、

主観的世界の質的な変容過程が想定できるのかという点に注目する。

いじめの集団構造と力学についての研究(森田・清水, 1986, いじめ: 教室の病い. 金子書房)は、傍観者の存在とその影響を指摘し、被害者を取り巻く社会的環境の複雑性に注目を促した。しかしその後、加害者と傍観者から見たいじめの研究は行われているが、被害者視点からの研究があまり見られない。被害者についての研究は、ストレスや精神的健康への影響がほとんどであり、孤立した被害者にとって友人や教師、あるいは教室や学校といった環境がどう感じられるようになるのか、よくわかっていない。いじめへの介入研究が進んでいるヨーロッパにおいても同様の状況である(Olweus, 1993, Bullying at school. Blackwell)。

孤立者の認知や感情の変化は社会心理学において蓄積があり、近年では脳神経科学の方法を取り込みながら多くの成果が生まれている。また、メンタルマップや環境心理学的アプローチは、以前から学校環境にも関心を寄せていた。しかし、いずれもいじめ研究との橋渡しが存在しないままである。そこでこれらの研究を幅広く渉猟して孤立者の空間認知のモデル化のための、理論的分析を行う。

(2) 孤立者から見た周囲との距離および時間に関する質的研究

孤立状態にある人間にとっての周辺環境が、それ以前とは異なって感じられるようになる可能性がある。その変化は2つの方向に予測できる。1つは、孤立者にとって周辺環境(特に加害者に代表される人的環境)が脅威であることによって、圧迫的に狭く感じられるという方向であり、もう1つは、親しんだ環境から孤立することによって心理的距離が伸長し、空間が拡大したように感じられるという方向である。そこで、中学・高校時代に孤立を経験したことのある大学生への面接を行い、距離・時間知覚の変容に注目し質的検討を行った。質問項目は、孤立するに至った経緯、孤立し始めた頃に周囲に対して感じたこと、孤立が深まっていく過程で気づいた変化などであった。

(3) 孤立者から見た環境世界の抽象性に関する実験的検討

孤立と環境世界の変容との関係を実験によって検討することが目的である。

「遠い未来は抽象的に感じられる」というように、認知の抽象性と時間とが規則的關係をもつというアイデアは解釈レベル理論(Trope & Liberman, 2010)や、身体化認知(Embodied cognition)の研究などで検討が行われている。また、孤立が推論など高次の認知機能を低下させることも明らかになってきた(Baumeister et al., 2002)。しかし、孤立状態が、周囲の複雑な社会的環境や物理的

環境の認知にどのような影響を与えるかは検討されていない。そこで本研究では、実験協力者が認知する環境の抽象性を評価して孤立の影響を検討する。孤立感の高さを測定し、以下の2つの実験によって影響関係を検討した。

【実験1：距離の知覚に与える影響】

66名の大学生（男性21名、女性45名）を対象に実験を行った。実験課題は、イラストが描かれた用紙の中に引かれた線分（52mm）の長さを見積もり、ミリメートル単位で答えるものであった。用紙には2種類のイラストが準備されており、1つは制服を着た中学生くらいの生徒4名と教師1名が楽しそうに笑顔を浮かべている授業の光景であった（人物条件）。もう1つはビルやタワーが立ち並ぶ都会の風景が描かれたものであった（風景条件）。実験では最初に長さの見積もり課題を行った後、大学生活における被受容感を測定する尺度を実施して孤立感を測定した。

【実験2：環境の抽象性の知覚に与える影響】

39名の大学生（男性11名、女性28名）を対象に実験を行った。他者と関わる行動を含むさまざまな行動のリストを提示し、その行動を異なる抽象レベル（高次/低次）で説明している2種類の短文のうち、「よく表している」と感じる方を選択させた。例えば、「友人と談笑する」という行動に対して、「楽しい時間を過ごす」と「話題を提供しあう」のどちらが「よく表している」と感じるかを考え、選択させた。この実験課題の後、協力者は孤立感を測定する尺度に回答した。孤立者にとって、自分の周囲に展開される人間関係は抽象的に感じられるのか、それとも具体的に複雑なものとして認知されるのかを検証した。

4. 研究成果

(1) いじめ被害者における孤立感とその空間認知に関する理論的検討

いじめ研究は、被害者の視点からいじめという事態を理解する試みを十分には行ってこなかった。本研究では、いじめ被害者にとってもっとも共通性の高い孤立という状況が周囲の環境に対する認知をどのように変化させるかを、既存の研究を展望しながら考察した。資源-知覚モデル(Harber et al., 2008)を手がかりにいじめ被害者の環境認知を検討したところ、いじめが生じている環境中で、加害者はより圧迫的に肥大して感じられ、被害者を援助できるはずの資源は縮小され遠くに感じられる可能性が見出された。資源-知覚モデルでは、自己が安全であるほど知覚は歪みの少ないものになると考えられているが、いじめの空間において被害者の環境認知は、加害者が実態以上に大きな存在と感じられる場合と、援助者が遠くに感じられ存在感が低い場合の2つがあり得よう。実際にはその両方の要因が同時に働いて孤立無援感を作り出すものと思われるが、研究の知

見をいじめの予防・介入に役立てるには、研究上両者を区別しておく方が良いであろう。次に、孤立はいじめの被害において広範に見られる共通点ではあるが、多くのいじめではそれ以上の攻撃が被害者に向けられていると考えられる。したがって、より厳しい状況にある被害者にとっての環境認知についても検討していく必要がある。資源-知覚モデルは自己の安全性の程度によって知覚が変容すると仮定しているため、被害状況の違いによる比較には好都合である。3つ目に、近年増加しているサイバー空間を利用したいじめ(ネットいじめ)にも目を向ける必要がある。ネットいじめでは、いじめの時間的・空間的制約のなさなどの特徴が指摘されているため(加野, 2011)、いじめが行われる環境が生活世界全体に拡大する可能性がある。子どもの生活世界がそもそも大きなものではないことを踏まえると、ネットいじめは中井(1997)のいう「警戒的超覚醒状態」を持続させ、より深刻な影響をもたらすと考えられる。以上の3つの課題が文献研究から導かれた。

(2) 孤立者から見た周囲との距離および時間に関する質的研究

中学・高校時代に孤立を経験した大学生女子3名および不登校の生徒が多く通う通信制高校の教員2名に面接調査を行った。孤立した直接の原因は、3名とも周囲の友人からの排除(仲間はずれ)であり、すべてのケースにおいてこの孤立の経験は本人からいじめと認識されていた。加害者グループの構成は、いずれのケースも同級生数名であり、必ずしも一貫して同じメンバーであったわけではなく、流動性を持っていた点も3名のケースに共通していた。いじめ行為は仲間はずれやかげ口などコミュニケーションにかかわるものであり、物理的暴力を伴うものはなかった。いじめ被害に際しての周囲の介入は、親や教師、学校が介入し支援したケースが1名で、その他の2名は支援を要請することなく自力で対処していた。

孤立経験の過程について語られた発言をコード化し、本人が周囲との距離や時間をどのように感じていたかに注目して質的分析を行った。その結果、以下のような知見が得られた。

他者との心理的距離の変容

孤立者は、孤立によって他者との心理的距離の知覚に変化を経験していた。心理的距離の感覚は孤立が深まっていくにしたがって変わっていくものであったが、必ずしも一方的に距離感が伸長していくような直線的な変化ではなかった。また、距離を知覚する対象によっても変化の仕方が異なっていた。孤立状況をもたらした加害者に対しては圧迫感からくる距離の過小視がある一方で、周囲のその他の人間に対しては距離が遠く感じられるという歪みが生じていた。さらに、

これらの距離感は、孤立状況が継続して定常的になると感覚そのものが薄れ始め、对人的距離というよりも対物的距離という印象が強まった。すなわち、周囲の他者に対する非人間化が生じていた可能性が示唆された。

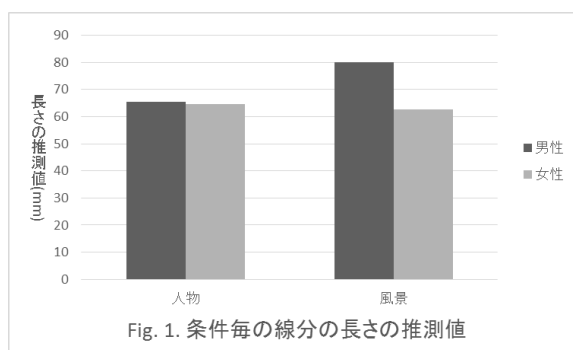
時間意識その他の感覚の変容

時間意識についての言及は少なく、またその変化も顕著なものではなかった。これについては、調査協力者たちが孤立後も同じ学級集団で生活したのではなく、不登校生徒を支援する機関等を利用したため、長時間にわたって孤立状態のまま過ごすことがなかったことによると思われる。

(3) 孤立者から見た環境世界の抽象性に関する実験的検討

【実験 1：距離の知覚に与える影響】

実験協力者が見積もった線分の長さを対数変換した値を従属変数として、刺激条件（人物・風景）×性別（男・女）×被受容感（高・低）を独立変数とする 3 要因分散分析を行った。その結果、性別の主効果 ($F(1,58)=3.91, p=.052$) および刺激条件×性別の交互作用 ($F(1,58)=3.56, p=.064$) がそれぞれ有意傾向であった。交互作用の検定の結果、男性の協力者において人物刺激よりも風景刺激において線分を長く見積もる傾向であること、そして風景刺激において女性よりも男性の方が長く見積もる傾向にあることが示された (Fig. 1.)。しかし長さの見積もりに対する孤立感（被受容感）の影響は見られなかった。

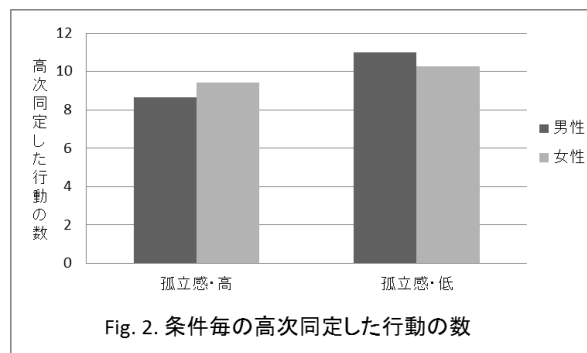


【実験 2：環境の抽象性の知覚に与える影響】

実験協力者が、他者と関わる行動に対して高次の説明を選択していた数を従属変数として、性別（男・女）×孤立感（高・低）を独立変数とする 2 要因分散分析を実施した。その結果、孤立感の主効果のみが有意であった ($F(1,35)=4.22, p=.047$)。孤立感が低い人の方が、高い人よりも、他者との関わる行動を目的などの高次レベルで抽象的に認識していたことが示された (Fig. 2.)。すなわち、孤立した人は他者との関係を抽象的なことと捉えるのではなく、より低次で動作レベルのこととして認識する傾向である。

実験課題の行動リストに含まれていた、他者と関わる行動以外の行動について、同様の分析を実行したところ、上と同じように孤立

感の主効果が有意であった ($F(1,35)=4.38, p=.043$)。



(4) まとめと今後の課題

いじめ被害者の環境認知について探求した本研究を通じて、周囲の人間関係から切り離された被害者の孤立無援感を次のように考えることができる。まず、いじめ被害において孤立はほぼ必発の状況であると考えられ、既存研究によって孤立の心理的影響が指摘されているにもかかわらず、いじめとの関連では考察されていない。被害者は周囲の環境を認識することに関して、孤立以前の状態とは異なっていることを学校や家庭の支援者は意識する必要がある。中学・高校時代に孤立を経験した大学生への面接調査から、孤立状態は当初こそ他者との距離感を不安定にし、緊張のため圧迫的に感じたり、心細さから距離が遠く感じられたりするものの、孤立状態のまま安定すると、他者に対する距離意識そのものが希薄化し、モノに対する距離感と同様になる一種の非人間化が生じることがわかった。実験研究(実験 2)において、孤立者が他者と関わる行為を低次の動作として認識する傾向も、面接調査で示唆された非人間化と矛盾しないと思われる。これらの結果は、孤立無援感が常に周囲への助けを求める行動を促進するとは限らず、孤立の深まりによって「人間関係の非人間化」が生じる可能性がある。その状態は周囲から見ると不活発でよそよそしい振る舞いとなることがあるため、介入を求めているかのような誤解を生じさせる恐れがあることを、教育現場および家庭、その他の支援機関は知っておく必要がある。

今後の課題としては、実験研究の継続と改善があげられる。実験 1 と実験 2 の結果を総合すると、孤立は学校などの社会的状況において距離の見積もりなどの認知能力に変化をもたらすのかは明らかにならなかった。実験 1 から距離の見積もりに関する性差が示唆されたため、それを考慮した検討を追加する必要がある。実験 2 では孤立の影響を取り出すことができたが、孤立は周囲の人間関係から個人を遠ざけ、抽象化した感覚をもたらすのではなく、動作レベルに近いより低次の認識を生じさせることが示された。こうした現象が生じるメカニズムを明らかにするためには、孤立感の高い人に低次同定をもたらす

のはどのような行動なのかを解明する必要がある。換言すれば、実験2では他者と関わらない行動でも孤立感が低次同定をもたらしたと解釈できるため、この点を明らかにする必要があろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1件)

波多野純 2015 いじめ被害者の環境認知.
静岡英和学院大学・静岡英和学院大学短期大学部紀要, 13, 23-32.

<http://www.shizuoka-eiwa.ac.jp/media/kiyou13-03.pdf>

6. 研究組織

(1)研究代表者

波多野 純 (HATANO, Jun)

静岡英和学院大学人間社会学部人間社会学科・教授

研究者番号：10311953